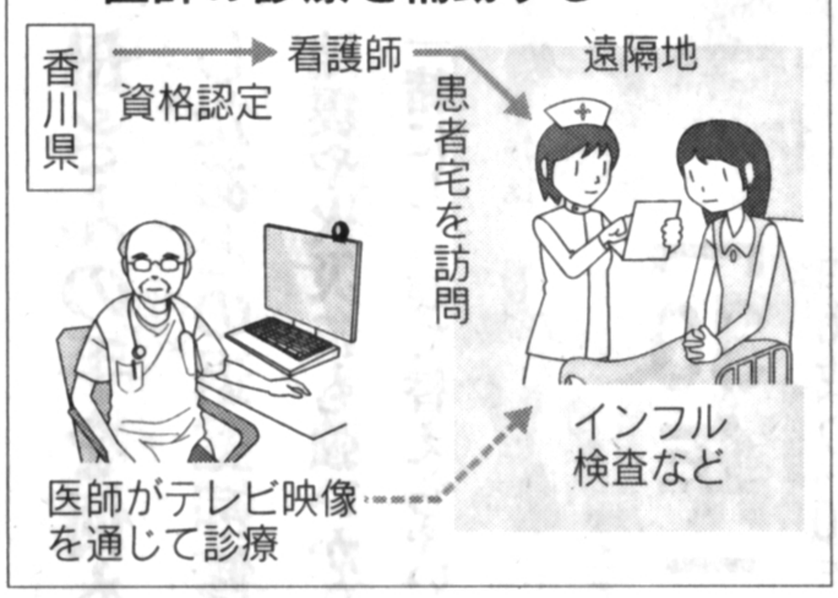
遠隔診療　看護師を活用

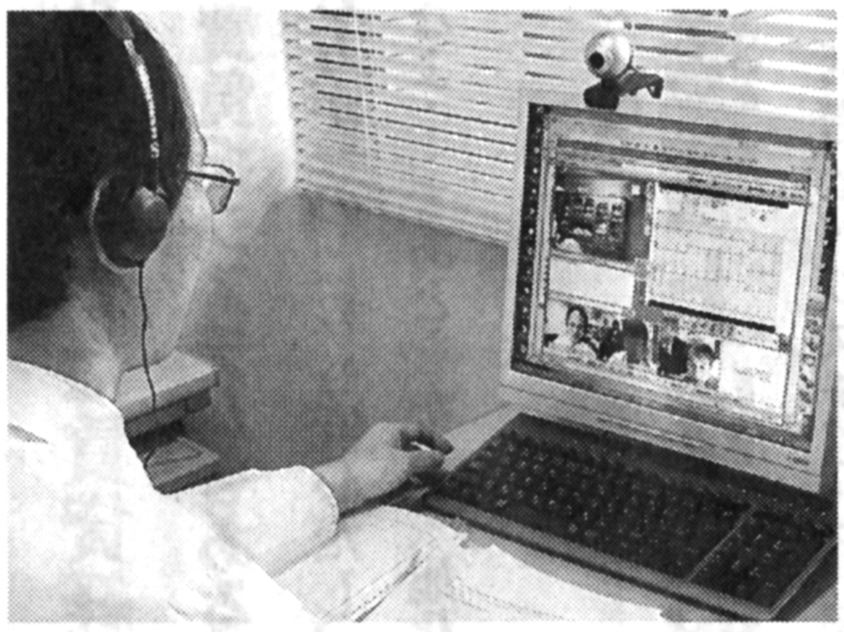
医師補助　香川県が専門資格

900万円かけ研修など実施

香川県は今月下旬、遠隔地でもテレビ映像を通じて医師の診療を受けられる「遠隔診療」について、患者宅で診療を補助する看護師の専門資格を創設する。事業費は900万円で、2年間にわたって計40人の資格取得を目指す。看護師はインフルエンザ検診などを医師の立ち会いのもとでしかできなかったが、認定を受ければ映像を介した医師の指示で可能になる。

看護師はテレビ映像を通じて医師の診療を補助する





島しょ部などでもインフル検査やエコー診断を受けやすくなる

県内には島しょ部など交通不便地域が多く医師不足が深刻で、迅速な診療体制を整える。認定制度の名称は「オリーブナース」。8月下旬から、実務経験が5年以上などの条件を満たした看護師を対象に公募し、研修を経て資格認定する。

研修は約半年間、実施。まずe―ラーニングやDVDを通じて在宅医療に関する専門的知識を75時間学習する。加えて地域の中枢病院でインフルエンザ検査の方法や腹部エコー機器の操作、排せつケアなど在宅医療に関する実技演習も45時間受講する。最後に、医師による訪問診療の現場に30時間同行するカリキュラムを経て認定する。

認定を受けた看護師は離島や山間部など交通不便地域の医療機関に勤務し、テレビ映像通信のできる専用のパソコンを持って患者の自宅を訪問する。インフルエンザの疑いがある高齢者や、胃や腸などの手術後の経過を定期的に検査する必要のある患者、胃に管を通して栄養分を補給する「胃ろう」をしている高齢者などの利用を想定する。

インフルエンザの場合、鼻などの粘膜を採取して検査し、その結果を医師に報告して診断する。腹部検査の場合には、看護師がエコー診断装置を患者の腹部に当ててモニターに映し出し、テレビ映像で医師に見せることで診断を仰ぐ仕組み。

県はすでに独自の遠隔医療システム「かがわ遠隔医療ネットワーク（K―MIX）」を医師同士や医師・患者間で利用できるよう運用しており、遠隔診療の実績はある。だがこれまでは診療現場でのエコー診断やインフルエンザ検査などは医師しかできず、医師の来訪を待っている間に症状が悪化する患者も少なくなかった。

そこで県は国に医療福祉特区を申請し、今年春、医師がその場にいなくても看護師がエコー装置の使用などを代行できる規制緩和措置を取得。これを受け、県は専門の研修・認定制度の体制を整える。

県内には有人離島24島に加えて山間部も多く、医療体制の不備が指摘されている。厚生労働省の調査によると、人口10万人当たりの医師数は小豆島地域では146・8人、香川県東部の大川地域では149・4人と、全国平均の212・9人に比べて少ない。